



志
保
之
利
三篇
初

1管5
508
31



15
508
31



志強くう之志を
 筑前長門道場着八洲塔の毘沙門堂として
 今の宗山堂の地不立り—— 傳教大師
 塔方の又系巻の付け多門方とぬ——
 大思天の像を彫して並一處—— 經心——
 住持所上人 彦小住せりま—— 杉野庵
 の神物小住し今の中を河津院佛の
 之像を感於せりま—— とあん上人は信
 の如力をの縁かち流り—— 之河余道場をま
 元祖よりうのい—— 寺内の法と——
 補所前の二葉の栴檀をう—— ま——

今之夫のあ小朽法師の新法拾遺集
阿のの龜井のちと経持の若の時阿の
と舟法師の歌の中と
漢のちと 若阿上人

吟海深き流のちと阿のなるはの流の流の
後京師今運寺小朽法師の遺る家阿の縁
と彫してけ寺小朽法師の流の流の阿の
之年九月二十八日寂と永く流の流の阿の
け寺ハ我の軍 普度院將軍富士流の
大長如建之と云
阿の寺の阿の流の流の阿の流の阿の
堂の流の流の阿の流の阿の流の阿の



行基の流の流の阿の流の阿の流の阿の
のつと阿の流の流の阿の流の阿の流の阿の
之れ阿の流の流の阿の流の阿の流の阿の
寺小朽法師の流の流の阿の流の阿の流の阿の
阿の流の流の阿の流の阿の流の阿の流の阿の
阿の流の流の阿の流の阿の流の阿の流の阿の
阿の流の流の阿の流の阿の流の阿の流の阿の

○ 正法中劫能事聘阿の流の阿の流の阿の
阿の流の流の阿の流の阿の流の阿の流の阿の
中門廊と稱し別小中門と云るま
阿の流の流の阿の流の阿の流の阿の流の阿の

身と吸つたり作ありとも又辨人
 少き協の時法泉中尋衣冠袴衣の差あり
 及たり〜狩衣の所は法衣の差あり
 其の〜等〜きゆ人扱費多きを命たまふ
 三家、禁及侍従上濃紫四品、淡紫諸又濃紫

○勝速日尊

天照太神御子

饒速日尊

高天原誕生
 天木日詔山命 尾張宿禰等祖支流甚多
 母天道日女命 文徳之巨
 宇麻手志麻手治命 物部連連等
 武徳之巨

此女神ハ神武天皇東征の時大勲あり
 一、其の二流の源を多〜て代々絶え
 仕まりたり

香積山今下ハ高天原ホ〜の湯名天取た
 其にては高天原命〜又ハ高天原命
 其稱セ〜音使ヒコハ田子其稱ハ
 夫人の所〜其名の稱ハ其ハ二名也
 一、香積山ハ高天原〜
 高天原〜
 饒速日尊神願〜
 高天原に飲めわ〜は豊葦原ホハ高天原

ありくもよ夢の教わくも其服御の
神衣シノキ帯オビ手貫テノケの之物を鳥見自庭邑に葬
— 歛て以此為墓と天孫本紀あり後
世日本式尊の御墓慶々小石もけ物也
永玉古一の凡倍とるりづさか也

○ 神武帝即位の始天ノ富命トヨノミの孫ミマの命ノミ
躬ミマを率て三統の神玉と正殿マサノミヤ安たて
まわり— 八条官の神あり天種子命
皇孫命神代の古事と共したまひ— 是
朝政を執たまつるすゞの栲渼の栲渼
皇手志麻治命内ノ物部を率て刀指と

皇之者に威儀と備わひるるは後世近衛
の起不道臣命の来目部を仰ひ仗とす
— 之門を備り給ひ— 外ト海ウミのち也
— 其れ— 永玉百友の序神祇官を政友と
次て— 永玉八省諸國さぬの職シヨクあり
其の八省政事のとりきりあり六衛
の重き他亦大ありさるる人との係
定りたり— ともあり—
○ 我帝祖瓊々杵尊降臨の處ハ日本紀ハ日
向回ムカヒ裂ヒ之ノ高タカ牟ム穗ホ岑シと云々今イマの勢セ治チ
山あり延喜神名式ニ日向玉諸モロカシ縣ノ郡

あがりくまふ夢の教わりし其服御の
神衣シノキ帯オビ手貫テスガの之物を鳥見自庭邑に葬
— 歛て以此為墓と天孫本紀あり後
世日本式尊の御墓慶々小玉もけ類也
永玉古一の仇倍とるるづさか也

○ 神武帝即位の始天ノ富命トヨノミの孫ミマの命ノミ
躬を率て三統の神定と正殿マサノミヤ安ヤスたて
まがり—ハ祭官の神あり天種子命
皇孫命ミマノミ 神代カミヨの古事と奏したるいしと
朝政を執たまつるすゞの攝政の於雲
皇手ミマノテ志麻治命内ノ物部を率てコノ指を

皇之衆に威儀を備わひるるは近衛
の起不道臣命の来目部を仰ひ仗とす
— 之門を備り給ひ—ハ外ソト儀ノリのち也
— 其の— 永玉百友の序神祇官を政友に
次て— 永玉八省諸國さぬの職シヨクか
りハ皆政事のとりきりあり云衛
の重き他小玉ありさる皆人との係
定したる— ことを
○ 我帝祖瓊々杵尊降臨の處ハ日本紀小日
向ミコ回カエ之ノ高タカ乎カ穗ホ岑シメと云々今イマの勢セウ治チ
山ヤマあり延喜神名式ニ日向玉諸モロカシ縣ノ郡

霧嶋神社と云々、今ハ薩摩國鹿兒嶋領小
して城下より二里余東小海也めり山
なり毎小ゆる山の者多し神代の故事
あり少き山の人の輪徳をせめて曰く務
らばこれこそ打拂ふと云け山忌
む務一語づつ吹散其色大凡のしつ
嘆くとして話を列しすやもすれば
人徒務ふまめりて化方一戸をたす
酒とわくとく有る務ふハゆるし
徳あり拂ふとくかまひとくゆるし
天宮解き 日向凡士記にけり
者よりふとく云

山頂と山脚と云

也のしつと雨注あり所折所は方とて神
神代の御深しとく九人斗なり金洋一掃
まりいとわくがくく見ゆ也山の半
そとぬしちの同く又方ち小姑あり
さうりちとも復盤石折里かたあり
これと神大と称し法別とて小あれ
ぬしとくや山嶽海岸に臨んを力とく
西精治の御神ハ山より法元まし
初よりちり年しちち地あり樹志けり
さひたる君地ありとて 肥前長崎人
日向東外記

應神天皇と八幡と号しちり廣幡

八幡磨と神和あり一在あり情のま
に所て八の情とらせし一云又ハ所記
之摩耶形の在ること幸合の記も情
持すり小神切紀千緒高智の記情片
之記志のハ度緒の八緒とりよる
情のころり情とさる

緒ハ玉篇小帛ありとて織機あり
假手あり度く多く織成終帛とて
美祿の御神号也

。浮屠の書小海湖と神竟の变化ありと
しつハ山海經海鮑か入の層と云ハハ

覺海をくく尼の老の言あり海嶠志を
小海とハハ盈虧に修やと云ハハ
尼のまの端ありてさす王亮の論
衛に天水を包水地を兼て一之の氣升
波と氣升て地沈む時と水溢るは
とあり地沈む時と水溢るは
と云ハハ一理ありと云ハハ
の所ハ必浩浩漲り隆を記し
り氣升て地沈むは小水動き溢るの
從軟又地震の後に海は定むと云ハハ
海を記するを年ものり

いふのうら地踏込し故あり

○北畠信雄と上野介信包信長と諱しむ

信純信純の界と改めんとし

其界不違ふとせむとす不武老人の曰

ふゆま有水の由外ハたふふ

凡子の代のふりれのさうりハ甚だとふ此城なり

とりやはははとて定めたりんかと古傳

られと感ししを縁と定むられしこと

信包ハ信純とす

○今の時別 松坂と和四百ノ表上ノ表

あり古奇

信純此玉といふの表のりし事名あり於方去の古奇

信包ハ信純とす

○北畠家に信意といふ人あり又知せりし信意

一書其考あり天正三年源信意北畠中將

不任す具教ハ滅亡の時退去せられし歳

二十五母ハ依り木氷禎ハ女信意此息を

小畠親顯し移りて其年八年誕生せり

信意流る信純と改め京都小寺ノ公家

口をりし終るまで也世系しん者多し

信家傳及小畠
抄考あり

○今川了俊戒子ノ書小水隨方圓器人依

又の十とをすはけねたぬのせよのぬ
年としよとく作らん作物を業年の
後歌のあらもく志の初を精まう也家縁
麻奴抄あり凡下の志をさとしり抄抄抄
法あり作し志づハ倭文り即年記不疑倭
文布抄ありしりる後場のり六ありる家
ましく下抄野下はせこれ神の字此ま
けしきさるや倭文のこしハ作らし
。あし、録のまを刊ゆわらうをしりる
形録の録ハ似しけし、忘め倭刻ハ後
すあし、ア部イの意しりて思るりあ家

己う傾刻す家不ありしりる其の築文を
。原考が、抄所探にありて小所りヤとく
わじり、抄りありたりしりる、と云、
。ありし、田舎見ありと云、
あじり、抄りありしりる、と云、
。或同桃ら葦矢抄ありの志は、
月ぬ、抄りありしりる、と云、
目凡追、抄りありしりる、と云、
。各口ニ、抄りありしりる、と云、
これ古く、抄りありしりる、と云、
。同國、抄りありしりる、と云、

母子弟の糕と制衣するのけりしと云
昔餅の如しりしと云

侍の礼服と素襖素襖上鳥帽子小刀

畧の付と素襖袴あり上あり少あり

足利家の事とハかくありし事深前度

より多くハありしと云いし

今の礼とハ今の下の起り下ハ服衣也

今ハ平信長公ハありし一足年

源家ハ置老人云

源家ハ傳ハ大江の巨魁より源義家ハ傳

光ハ傳ハ大江一流義家ハ傳ハ義家ハ傳

相傳の流小ハ源一流あり

藤氏ハ傳ハ大藏冠の御侍嫡流ハ武智磨

以下ハ憲ハ傳ハ藤一流あり南家ハ秀郷

の傳ハ山内城ハ藤流ハ傳ハ利仁

の傳ハ赤尾ハ富樫ハ傳ハ列家

紀家の傳ハ武内宿禰ハ傳ハ大江の傳

ハ武内よりあり

青延の男子多く東武一武を講

せしハ源河保互ハ傳ハ工足ハ一族あり

ら島と教也臨守府新田城ハ傳ハ

家折有せり凡内合人の官ハ東皇子

下り武平と習ふ者なり。又その武威
地小海にあり。その子と習ふ大槩
所用の事。古辛府菊比城等の法事
その人其邦の人と交接せしむ。内紀の官
多くおもしろくあり。

侍従ハ文武を兼内今人ハ武を兼文と
業トシテ内紀ハ文筆と業トす。付之官ハ
内分カニセウスケサクシ多ク獨歩の官あり。その中
習者ニ屬ス

鄭夢周ハ東文選百一傳類星王高武家
傳畧曰。耽羅初いり。くわん神靈初まて

神人と化生す。高乙那良乙那又乙那ト云
俱ハ漢獵トシテ今テ波濤ト曰。日本國ニ
其之女トモハリ。配テ乘テ小令ハ船ト
以テ。一。蓋テ五穀牛トモ傳ト云。是我
古史ハ持カ。一。事。記天照太神之女ト
云。其ノ中。休傳一降。一。舟。ト云。海。中
ニ在。号。ト。道。ト。貴。ト。云。宗。係。若。所。祭。ハ
神。ト。云。ラ。れ。ト。得。テ。傳。テ。耽。羅。大。荒。ハ
時。ト。云。ト。す。ハ。欣。日本傳國比
故書也
左大將家 通傳大御言 今乃國東海下向の次
蘇田之小御新のつり 己世四月 先并殿也

ものハるくせいやり

○元和の末我 公室の徳官りとするや

清御戸もそれと有り人あり〜物例

某名宗仙何となく清御戸なることや

お能せ〜大敵公清上洛元和の時公上洛

よりあり〜清依山下おれも書相伝

乃ハ竹中津御清室志水おやみ

夫〜清御戸の類と考次公妻

おろ平兵衛山向金兵衛文祿四年

石も終りぬ〜清御戸役節神〜古人

行り〜

○或人日記清文を徳神室印の裏小幸

盤裏祀等上及て久〜き凡俗なり

諸社の牛王を用やりし中古の事

なかり合て徳野の牛王と月泉何日

徳野の神を以て折云と考

神とす泉ハ佛氏小あり後優

波塞日圓浮提守護神一六妙徳圓滿

證識大善菩薩二ハ小辰

大天補陀洛迦に有我國那知此三神延亡如

戒文攝等云金剛室戒章牀

上の三神小あり起清文

神小あり徳野の牛王

。を司るこれに於て祇道に非ず

。夢窓玉武成師見の嘉海師才華山

と云 秘傳傳るに對して能く佛の不見て

打さくはるおかしきあり

悲惠戒佛 佛名經にあり 蘇波姑經 漢音にあり

子流水長者 最勝王經にあり 吳音にあり

付れり何り胡盧汁吸長者ト名あり

。法華文句小鳩般茶鬼の譯語冬臥ト云

け鬼の陰冬臥の如くは時ハ有るを少す

時とこれ小話すやと云これと後小かき

いとありしは

。明祿宏所述の正訛集小異邦の傍老爺

と必を尊稱とて相高と必は己を怪ん

すとする訛をとり老爺ハ官府のり

傍定しき小れす物ふらぬを以て

稱呼とするも拘り

。世に魚目監觀音とて描く秋終儀軌の

像ありし唐の馬郎婦次女たり

え和十二年のゆとて宋の潘漢像

尺くより一斗普賢示現とやり佛書

少きかりし事あり

。或日我敬公御狩の時鹿を御取入り

。瑞り鹿食の穢る有りと作すまゝ
如何申回云の市村藏高付張るる右子
あしこれと考ふる小矢岳武曰凡の穢
六蓋喫肉三日云法曹日至要抄云亦曰
喫鹿の穢之日といり是れ松家の書小
あしすたは天子元正の御孫也歎肉
を奉りてしり江家次子等不足り
公是の書の依をいひ給ひしや
。或日中世の書小みぢ之七本之をとり
穢あり今しりし七本の書しり予曰穢
あしあがりみぢ之とは又五重穢七本之と
いふ

七張あり聚東行幸にハ九本之句りしと
も其饅貝等其美をいひたりしと
これと礼家饅貝と云ふもこれを傳へ
これと穢るなり也これを田舎すまゝハ
只七張あり
。南玉の名不音の心と八草山と記せり
今ハ具正律寺のありしなり曰八草山
浄白村小吉伊の松と云ふ古ありし竹石の
山名あり古俗の傳へる不泉凡の藤印の
本家の狐のたぐいと一般なり孤兒母を
志すいなり竹松樹の下なり其の意

のわざを祀りて年々としつゝのいつたスツハを祀
ふ比しつゝ云ふると今も昔もあつたの事し
すけりや

。榎室連の作と云ふは子山殿に巡行の時
水鏡の古磨がかる門。お板折りてを
日付拵しと家のいしとちぬく編と仍
榎室連と云はれ給ひしうりぬ長孫
記せり

。天皇の暦ハ一歳と云ふ事とす 熟計 自正月 至四月
茂時 自五月 至八月 寒時 自九月 至十二月 されん正又九月ハ
印土と云ふは初月なり 阿古阿陀等の暦ハ

二十四時を六十刻と定め一箇時を一日の初
とすは月を並すして年を異たさる
法を 教章 曆 談 凡 卯 されは百箇一曆法にあらす
或は建寅の月を歳首とし春分とて
年始しすりしある阿古阿陀等と云ふは
のちを初とし十日めふあつるものと云ふとす
又月の初初日と一月の首とすはあま
あつる

。一曆表は春秋の結岸今と年をり年々し
三月ハあま分秋分の日と中日にあつるは
せしむる安倍家の暦にたつる近世春秋

二命より三日めを其神より六日めを中日
とす九日めを終りとす是を古くは彼名に
乃其日没日小あつれ一日を延て次の日と
なりとせし有る事ありしは古き曆從を
用ひすりのとて二命一日と隔て彼岸の
神とす

。系玉御古延臣印ありて延す其御辭
を物ひ号とせし福ハ此等御事あり
東之際橋政礫家入るして如實と法講
ありしりちりちり新我法名と換け
し

。湖汐の進連は古地より後へ舟りかす

サシノキキキキ

吳邦の舟中より見ゆ系玉御事と取
りかすは舟は揚別難は津より
西彼後舟名の御と元舟余里より
湖汐ハ上り下りはのまより國筋のより
舟あり舟余里の海湖よりありあり
いしんげし是より海前山ありの
まし舟余里の海よりあり是よりあり
まのかん終ふありて舟余里ハ又上人へ
よりありあり舟下よりありありあり
又舟の尾は舟の舟よりありありあり

麻増ア去年より今果麻取の益々多し麻増は
とつて心とちん又

・柳井やとりぬま川の甚たわづらふたはあすの里
大災此凶をりつやーまのや法里野飯の
口碑ホウ水の着りり作付丹貫川古家
利する取中そわらみーとらり

○山城至小原よりおのチ彩と音くらぬ股帯ハ
世俗と異なりて前の方そあせ終ふ
首達礼の儀付ふ入所階りのせしめふ
チ彩と裁きりふふあ、と人費へまー
とは好し省執をわひて足也をわひー

余れありとハ能あふ人残りー
○壬生れ念佛ニジヤデーンと耕すといふ
年とろは着付地小御合河ノ罪人刑
せしむー其の連善し付念仏神ー也
これとありれとて放出出と鳴へ元霊と
慰と作らりー寺僧のーり

或日ジヤンデニハ征太鼓の声ありま
けし念佛おハ、こタと称するも知子のあ
とをさふーなるのとらり付れ法後多
○或日勢見江原の農夫ハ水田を耕ふ者
稗とみしを我尾州ハ瀬と川の牛耕止

一人するの功大繁曰一段と久す一漸と
用ゆ家之人の富のたしむ牛と飼費あり
ては其力を省く利ありんけ土不習いなる
也之歎と勞するといふゆれを要あり也カクテ
壤軽くして泥土湿めり粵鹵此地は
物平と用ひわく耕し是れ深耕ハ亦て
稀ニ害あり
筑江の寺の曰く多くハ土氣爲し故り
物、永尾西蟹江あり知多穀斗稗と
粟とす不ぬし一車百斗穀小牧以てぬる
ぬ多り此又物平耕せりん稗耕ハ僅小土
壤寸余とてか行漸め切ハ宜小進しと

いりとも四す牛の垣と熟す尾尾のめは
衍沃の田ハ深耕をにあかされ稀苗根を
長せすとも田ハむせり水涸としると亦稠
救日強稀せすられ根ありとも左あり
彼埴苗の地と少ぬとけり水稀秋さる
か、瘠枯せりとも土地の磽腴ハ傳へ耕種
日長ありり法昆不同をありし
。在り玉天毫川のぬ川下小願院寺とて
ヨ事師とて安す家密院ありけり亦龍のそ
とていと大ありされかし一あり昔年ハ一
枚一尺あり
穀のありさむくしりり一ち毫川の標とされ

うり記述りうと云く京師建仁寺に鬼の
首として人車の髑髏作り——是ハ中縁
したくおちりううらゆ一茶伝蔵の信ふかぬ
おとし人ふそむられしと云

。法寺社の縁起としりお大繁ちりて世の
る学老伝——多しうほくあり事——と
あかく半たの物さあまひる月さるし——
我尾別一文縁起を 敬云所後しこれとハ
秘しし代よかすうとありれと作し——
初産さししりしと緒るのおとしぬめく
おさめを——そのゆみ故者人門家の合子

うりてゆこれと辨えせ——小いよ何ふは
しき文字もし事——実虚談多し——
敬公の作ハ首さうる物をおりさるふハ
させし——されし物さおと世中虚帯
して一文の御あとりはふなりうかりん
事とふりおありし——ありしや他を
持せさるわらひ——心おりしやあま事おが
代のゆい作さるはさういありあやと
深田晋甫とくありし——あれ感——事——
。内宮造りとりしとこれと通したるあ
内室ハ天井あく——る保裏のう——造り

。そし紫宸殿清涼殿ありしころちちりたり

。しころ法寺の金堂ありしころ室佛りの法より

。古佛像よりその佛より希すその珠と

すかし拵すり小日中紀二十ニ註作鳥為造

佛之工と云々推古天皇御宇の人ありは

いしころあり佛あり佛土建中ちちり

。或云凡元者の靈小水手向るハ佛法小效

。危りりし中拵すりよそ永玉上久の智

俗歎日中紀其類の長死せし時乳姑葉

佛の宮と稱して玉玉御小敏堅り玉玉掬り

水盤をりしそ其榮の時水吹きりさるさる

初ありこれ永玉佛法ありさん等の事し

佛我とししと銀鬼のハ佛菩薩小水名

品等あり今の佛ハ我祖先の靈としし

しゆき銀鬼とししそあり共々思ひさる

。甚しきあり新我云凡銀鬼を佛を

と身をたかりし幽林の跡殿と稱し

。時小の念を摩ふ事あり今佛殿の

裏小初定のみ施鬼の念とらす

。年しりあり佛盤陀等の鬼あり

。大大堂にあり下りしとあり佛の樹あり

佛鬼とく佛念の法密ありし法を

・ 移去の故舎と亦記ふと一とあり

○ 大和国世尊寺のわらひ我玉も儀の始なり
元亨
新書

○ 青蓮ノ皆丹景ノ唇と針せり丹景梵語ハ頻
婆唐ノハ相思子ト云 翻譯名義ノ有
倭俗云タウアツキ

○ 御湯殿ユトノの上徒然草抄物多く誤りて解説
百八章
セリ是禁裡の君の御呼なり 二水記大永
六年四月の條上 叙勅ノ君昔禮所儀
定不御湯殿上等と云り 是と物すあり
常清不の而廂向のハあり 是四字連続

・ たち称あり上の字ありハ 御 浴室
の事とわりの 子廣戒記 長永二年十月
の條小御惱 御平倉の段今自始御湯殿
也と云へば 御浴室の事あり又御湯
殿記と云らすり ち子由 一とて 女房の文
我ノ日記セよせたり 御記の御記を果す
十六日に御りりも 一とて 御記の御記
・ かりりて 御記の御記 一とて 御記の御記
・ 御記の御記 一とて 御記の御記
・ 御記の御記 一とて 御記の御記
・ 御記の御記 一とて 御記の御記

家の牌子とくくけ寺ハ快公羽後和尙の完基
なり

○諸社の神官称呼久東小諸社日本後記

大同二年の條下日或有任神長者事年遣

例其有官符任神長者宜改為神主ト云

付ころといハ神長と呼を初して神と

稱と云也神長と云て伊勢の一稱也

○と長官と呼首の神長の事を言

なり

但し長官次官ハカニスケといハ一稱と云

意申して長官と稱す歟

帝宮より始太神文代造皆且ハ表世の

運依く古代の神なり

物小和別提招寺人孝謙帝の御元天平

富字三年己亥創建今ハ位四年申年

初て凡九百五拾五年幸りて一度の炎上

かりく修くしかつすまして新あるた代の

梵刹なり

○牛頭天王の梵語密宗の次方世小多く知り者

なり瞿麻手揭唎婆耶提婆囉惹

瞿麻手ハ牛揭唎婆耶ハ頭提婆ハ天囉惹ハ馬の
梵刹也

○或回国温泉涌出の地必神を祀りて結と

す吳邦の七のりもやと日三秦記云驪山
温湯旧説に以テ三牲祭乃得之云云

○富家入道殿小俊頼相長と云ふは日清の

アソヒモ

偶アソヒモ懐アソヒモも糸りて詭はりまうりもあま
かしアソヒモ歎アソヒモふあうて世の中ハうきまふと
乱るのま思ひもつれともあれさうちり
げあつと悔いぢりあつて後れしり
ちりとしてあたらちりあんなしり
永縁伸正けま一と他をのしり
此記也法師たふかういさめくあま
やして神縁多るしりも神喜の心こそたれと

しふふとらうりこころいそせあぬい時人
けうくさすともあんないあふ教れぬを
是とくしちあうくや思ひあへあ
そせすしそ目目さ小貴くそそ世を
しりれちあふとも長夜をの神

俊頼のあひりり神一永縁ハ日清の教
い中一り一ちあうくや思ひあへあ
稱善あひりり神一永縁ハ日清の教

○或日如神鮮りり新法對馬を法を歴て丸
ふりり一昔新代新羅りり東向日向ふ

○我玉厄年の祝ありて尊卑初より是
邦も亦年忌の祝ありて甚拘まる我國
男四十二 女三十二 皇邦 七歳十六歳二十歳廿四歳
廿七歳三十二歳三十七歳四十二歳 忌年尚丸
男忌 忌 雙女忌 忌 宜又と云る 陳繼儒々君羊
碎珠と云つて小斎齊の事 渾々月繪六氣と
して入子を教へてか人々偶年の俗忌
を以て許さざりし事ありはるありし
も久しと見る 冠の年の名礼も男も偶
年と忌女も奇年と忌とつて 福福
令あり俗忌と云ふはて初より是を
信せんマ鳴呼惑哉世の人

○法論ホ味ニ曾ハハりし南都の制也 具福寺雜麻卷
十月法場論日を直れ 講師等小水の舟小坐と
退るるといふとて 異直説と食徳法論
味増の名ありと云や 花鏡に詔書多し 食
すのりさるると云て 惟嚶子め延談し
考食つは 融小水と載し 記せし 是も又
坐を云ふと傳しあり
○狗児胎婦人懐胎して 經水行事者所の
如多ると云う 孝翁々一承言集小入印
時俗の名つる所 盛胎垢胎右より
山新よりして 承俗よ云 玄キク生胎セウ是あり

。能不能論は嘉靖^靖年中、小翰林二人の肩
案に坐し、楸をかれ、怪しむとせし萬曆の
至して、四人の肩案の路を定まり、郭門
をかりふられ、問者ありしと、りり、我至今
女仕の、人、自病を称して、悟樂を乞ふ
三、四十年、希と希ありし、庸醫も、之、四
人の、昇、丈を、引、て、簪を、走、り、心、を、業
とす、此俗如此、嗚呼

。肥前同佐賀を以、里、川上と、り、所、を、
付、地、に、在、る、盲、人、ハ、老、少、と、あり、皆、繩、を、以、て、
付、く、と、く、里、俗、は、法、を、ハ、麻、為、
朝

九列、又、在、り、し、日、付、村、の、川、に、大、蛇、住、て、人
と、交、り、事、久、し、有、報、強、り、大、矢、を、射、り、て
彼、蛇、を、射、死、せ、り、し、その、矢、蛇、を、射、ぬ、ま、川
上、の、津、の、水、を、あ、り、桶、に、立、し、蛇、は、川、底、に
沈、ち、り、を、盲、者、あ、り、一、刀、と、さ、り、て、水、に、入
死、蛇、に、繩、を、つ、け、て、引、あ、り、し、後、述、の、如、し
付、里、の、盲、人、ハ、一、刀、を、帯、り、し、り、二、三、十、年
前、彼、社、の、木、樺、一、枝、折、り、し、し、ふ、と、中、半、の、
大、の、かり、し、と、あり、其、の、折、あり、凡、そ、の、言、
ハ、九、寸、半、也、何、と、も、あ、り、し、と、人、を、案、も、あ、り、
あ、り、と、え、し、し、一、種、人、は、は、り、し、し、有、報、

子修理亮下野守泰細母平時政女也二男有見守宗朝
皆子孫多矣女子二人一嫁内大臣通成一嫁權
大納言為家

○伊勢国司 公官在大河内北畠一族相替居之行司勢

北畠權大納言顯能從三位顯雅号大河内滿雅二男也有子孫

滿雅權大納言教具右中將政歸權大納言村親

參議左中將晴具教信長公教之信雄信長公教之

○龜岩龜泉と云二言京師相国寺北畠教の物

あり室所將軍家の實録也日件録

足利家貞の廢の小説文明雜誌ハ高叶の注

話ありありと云説謬誤也見ありと云

杜撰の類に非ず

○よき殿とい殿上人の称呼原中御所河内

の位四位秋太ニラキニタキ又達ニラキニタキとい又位の者と云公事原上

六位とは刀祢と呼

○ウナリを心海と云るの位尾張国の秋

常陸国内海異邦の書とい甚海と云せり海

纂要寺小足と云る外洋甚海と云る

○相撲にセキコズテ等の修り梅

万色系上防人部領コといつら西

古れお撰人のつらめり解

たれセキコズテといつらめりお撰

同二幅對の繪又一偈衣を縫ふ之の
朝陽と云又一偈月下誦經の處を合
うれと對月としふ之何なる社師と云
事と云すすと云布曰うれ社師の名不
れ古人の句休体を寄せし其の歌の
歌と云しと云わたり其の句と

朝陽補破衲

對月了殘經

これと朝陽對月、圓と云ふ二偈のふりは
傳ふすされはかる事と辨すしと
らぬ讚詞と云ふことあり繪も傳ふ減者の
為死ししと云ふあり

。藤氏も家祖正一位武智ヲテ磨マ 贈大臣 伊 墓

大和國宇智郡 宇野村永山寺 洛東泉澤 寺支配 後山

の巔と云ふ 古松 後、阿陀墓と云ふ景徳

の地ありとしふ彼寺ハ壺坂の西南四里斗

上足川の北端あり河城の也牛馬を通

せず若くぬ者奉てこれハ為依して阿

ゆの地と云ふや 寺ハ武智磨の御親

と云をす束帯 けりしと云ふありハの繪あり像と云

小をたを描き 傳ふと云ふ

。三幅の拾糸赤としは一山のや、小物の、三幅の

山と松の之多し 十餘所もあり 傳ふと云ふ

高工 捨奈の明神として神社ありけり
捨奈 高工の明神として神社ありけり

いんざんとし
傍邦庵記

○長谷寺 荒廢の時時風浄阿文高原金蓮寺ノ祖

復せしまきしとせは影今不あり

○壺井の八幡 東市三河所をあり又源頼信

頼義家之代の御墓あり元祿中申命

小依り之を捨奈西一径の里あり神位を

新授きしとせし同時通法とて御連

之あり二百石の地と寄りさせのい高直宗之殿
けしの後のまき

神位は從二十石とあり壺井と

八幡文山下小あり井有るそし佛像と

多難し侍りむ古代めりのと云々

○山城國紀伊郡井か里の堤小やまゆき

たありゆきあり井か里のゆきありの里を

とて南やる山下清を流と云ふ小井あり

種ありと云々右のち和めりしせし人のゆき

○我玉とて云ありてとて賣り買ひと業とする

考をハハクテウと云是御案を託謬し

かきしゆと云又馬士老子かく梅すり

馬工連と云あり年群御長と白紙

ありしお免宿禰の後裔也母系古南時之殿

馬のゆきをくくせしん長小名一物い
の原田馬の丁を曲りしと後世信家の
業又似るる馬士連と音も清くハクシ
と云ひしと又時してハクロハクウカと
呼しとる者茶師の所ありとやうと
みてん懸者者とヤクシをこと云と等し
さ歟

○儀儀鹿をかのまゝとくわとハク熟臭気
ありなりゆりゆしと今日りぬ糸船は鹿の牡
を鹿船ト云牝を鹿ト云かとハクとをくわの
まじり

熱田宮符

神主外正八位下祝部宮磨ト云云

右職位姓尸名を別て云へは

神主職也外正八位下位也祝部姓部尸宮磨

祝部ノ姓ハ姓祿建角身命之後也云云

當時祝部氏を以て熱田の神に補を

入く

祝部の類巫部宮部物部工部等の如し
部とは皆其尸也相伝真人の如し今熱田
宮の祝は祿中して姓小形子宮磨の衣白と云
説は北あり熱田祝祿ハ正工師

氏也

大祝ト云ハ尾張氏 祝と云ハ切リソハ神ノ
の神供人トホフリトハ牲を屠祭 役人
ナリ以初シ 終あり 祝家ハ祝部と唱
テテテ書シ ありあり

昌泰三年四月ハ官符に 勘野社の祝荒田

并言ニモソリ 祝職あり 我ハ末代ナリ

ハ官符封家細丁の字あり フケモウテウテ積

着我官符初あり

。惣田官の神人尾張氏ハ文司初主祝師
惣換授等家ノ例あり 神ナリ守ノ我ハ

大内人 兼田ノ臣ト 辨頭 今辨大文ト稱す 大宅

真人ハ列當者 田真人ハ換授等ハ補せし

その他大系及部ホの法氏 同衛の友人ナリ

初皮ニ 納リ 一 家多シ 今ノニハ尾

法氏を神官と稱シ 其他祝家を降シ

弁大際中ニ 獨ト 以テ 古ハ 計 終 あり 終 あり

ナリ 神人ハ 文司 祝師 惣換 降 終 あり 終 あり

苗 終 あり 終 あり 終 あり 終 あり 終 あり

又ハ 降 終 あり 終 あり 終 あり 終 あり 終 あり

年 非 官 あり

ハ 府 人 ナリ 水 終 あり

○ 賀田大文祝師職 田邊家 惣檢校職 馬場家 大内人

付介ハ前記ニ

八釵宮 祈年祭新嘗の備祭田邊氏奉宣其他 俗節等ハ守部氏 丑卯九 祝詞

高倉宮 丑卯九右京宮守也但祝詞ハ丑卯九奉宣

源太文宮 祢宜職馬場氏神供ハ馬場氏ト丑卯九供奉 丑卯九祝詞ハ田邊家奉宣ニテ神饌ヲ徹ス

火割宮 田邊家奉宣

氷上宮 久米氏但祢宜職ハ馬場氏神ニ 故ニ奉宣ニテ御祭礼祝詞奉宣

紀太文宮 厨家諸司ノ二家奉宣 東西十三社 奉宣ニテ御祭田邊氏祝詞但 田邊家奉宣ニテ奉宣

青衾社 丑卯九祝詞

乙子社 二年十月第一 彦若社 二年十月第二 神宮奉宣

御田社 長岡氏奉祠 伊上太史 田邊家祝詞奉宣ニテ御祭奉宣於此社行之

